

淀鯉出世瀧徳

上之卷

ふつ、云々客をより又客にふらぶ、にかく霧は不断云々半家にある霧は不断の香を燒き云々の句の作りかへ
 朱雀三谷一京の島原、江戸の吉みつ一見にかけ云ふ三津の新町を野良局一阿波座島とて鏡なき客御座町テマ一颯の恨付を強に下ぐる
 威權ふる手一威權振ると古手とかく大木戸一新町橋の入口
 夫れつらく一謡曲安宅勳進帳の作りかへ
 小傳一禿の名三番大鼓一願の終りの大鼓にて亥の刻
 亥猪餅一十月之を食へば病を治すといふ

唄曲輪住居は時雨の雨よ。ふつつふられつ、むらくさめのまだひぬ露もまだ乾ぬやよや。ア、霧はふだんの伽羅をたき、晝にもまさる燈火は、月常住の夜見世かや。朱雀三谷もいかなこと、直下にみつの浪花の里、戀も所の氣につれて、萬手廣き大曲輪。色に擲つ金銀は、土か砂場の西口や。思ひほころぶ袖口を、九軒阿波座の野良烏。月夜はなをか闇の夜も、瓢箪町を腰付に威權ふる手の印籠の、底に焚がら吸がらの煙に油煙たな引て、霞が關か東口、爰ぞ浮世のたての大木戸、あけぬは銀のとがしの關。夫つらくおもんみれば、大盡客衆の秋の月は、小判の雲に光り、小傳よびましや長へんじ、驚かすべき夜半もなし。三番太鼓つてんてん、天下は夜なか八ッ過曲輪は戀の晝中や、駕籠やろばかりぞ寢聲なり。頃しも初冬亥猪餅、小豆織のべんがら袴、羽織の上に手拭おび、頭巾鼻まで顔隠し、女郎買ふべき風にもあらず、さながら用なき體にもあらず、どちらへ何

かたむくろ一堅
意地
せいだう一政道
にて取締の儀

一くらあかう一
一際をあけて空
にする

とも片づけて思案に落ぬ風俗。新町橋の橋の上、橋辨慶が薙刀の、鞘拾ふたる如くにて、うろくとして立たりしが、ちよこくと立寄て、「是駕籠の衆、卒爾ながら物問ひませふ。今宵九軒の井筒屋の客は、何處衆の何とした人、また爰に遊んでかどふでござる」と尋ねける。鯉ア、されば井筒屋のお客は、隠れもない八幡の住人江戸屋の勝二郎殿、替名は鯉様、拾萬兩遣ふても、こちとが百錢落いたとも思はぬ程の身代なれども、新七とやらいふ手代かたむくろにせいだうし、一門衆、町所まで頼んで、土藏々々に封をつけ、一分の金も遣はせなんだけなを、惣兵衛といふ相手代、若い旦那の氣を詰させ、煩はせてはならぬと新七を追出し、氣儘にぐはんぐはと遣はせる。鯉が簾を飛で出て、日比剛染の茨木屋の、吾妻をとんと請出し、明日は直に八幡へ、今宵曲輪の名残じやと、井筒屋で大振舞、何じやは知らず井筒屋の、庭から門まで長持で通られぬ。今夜の物入ざつと積つて二百兩。扱も金は片いきな。有る所には有るものか。私等は夜晝あがいて三百は儲けかねるに、能ふ飲だとして一步取り、よふ笑ふたとして二步取り、兩肌脱でこそぐられ、鼻の穴へ胡椒入れて、くしやみしても一角。いかな鯉でも鮎でも一くらあかう」と語りける。新七扱はと恨しく、腹の立つにも主思ひ、「ム、夫は聞及ふだ富限者、ずんど若い人じやけな。仰山な酒

蛇—大酒家

鶴の橋—男女相
逢ふ事
まじくち—共に
の意
遣手のつな—渡
邊源次綱にかく

呑と聞たが、今夜も酒であらふの「駕」ア、くならびもない呑拔。親茂庵といふたも命を酒に替られた。鯉殿の母御ぜも元爰に勤めた人。どちらへ似ても蛇の子孫。夫でもよい衆のしるしには、萬事に達した器用人。能の脇師を手いけにして、九軒で主の座敷能常住酒で足ひよろつき、三番叟も高砂も、皆狸々の亂れかと、思ひ升」とぞ笑ひける。女房お半も手分をして、見外すまいの目もきよろしく、鮎堀邊吟行來て、夫を小影へ咳きばらひ、招き寄すれば新七合點、そつと寄れば耳を寄せ、半「なふ今迄西口につけて居ましたが、爰へはまだ見へぬか」と叫けば、新「ム、よいく様子は知れたぞ。まだ井筒屋に居らるよけな。程は有るまい、ぬかりやんな。人が見れば不審が立つ」と、一ツ所に立ちもせず、橋を越たり渡つたり、忍び佇む女夫の姿、夜見世辰りが氣を付て、甲「ヤアこつてりと味な事、妓狂ひよりのあの方の實入が能ろふ」と云も有り、乙「時分から心中の下地か。又義太夫が口の端に、新町橋をかさよぎの橋」と語りて行く人も、絶て其夜も更にけり。新「なふあれを見や、中から提灯引舟交くら、禿が謠ふて客送る。そりや是に極つた。和女は駕籠に取つきや」半「こつちへ任せて置しやんせ」と、大門際に待かくれば、「遣手のつなじや羅生門あけてたも」と云ふ。茨木屋の大盡鯉にはあらで雜魚場の人、「すぐ木様明日駕籠の衆頼む」駕「合點」と

手ぐすねー待標
ふる所作
佐渡島傳八ーむ
どけの役者
しんぞー眞に

八十末社一歌多
の暫間

かさとつてー
香になりて

つゝをー田にこ
ぼれたる扱、使
ひ餘しの事

北へ走れば新七夫婦、なむ三枚肩見送りて、口を明てぞ憫れたり。新「それく、そこへ又提灯、今度はよもやはまるまい」と、窺くどるを手ぐすね引、女房しかと引提へ、見れば色は眞黒に、横肥つたる菊石燈、道頓堀の佐渡島傳八、はつとしらけて立退ば、傳八も膽潰し、「是は君何し給ふ。人違へとは存すれども、色に袖を引れて、しんぞ忝なふ思ほゆる。ホ、ホ、く、賤も昔は戀を磨き、年中曲輪に入びたり、太夫天神に引づり引張れ、夫で顔が引つた西瓜の様な顔なれど、色は黒實すと風味のよい男、しんぞ一切振舞たい。ホ、ホ、ホ、く」笑ひて南へ歸けり。暫く有つて、井筒屋の能が濟だと出入の者、兵法遣ひ座頭茶の湯者古道具屋、大酒食悦お影を蒙る八十末社、流石の曲輪駕籠きれて、雪駄片足の酔潰れ、遙かの後よりのさくと、彼奴は手代の惣兵衛め、同道は佞人組、能の師匠の富川め、京の浪人軍四郎、醫者はすれども本道守らぬ目薬師などと、中にも惣兵衛かさ取つて、「なんと何れも旦那のはばを御覽じたか。あれみな我等がさする事。兎角此惣兵衛と肌を合せ、羽翼に付て廻らつしやれ。一期の身代固めて遣ふ。はて旦那の身上で、一年に千兩二千兩はつよをでも有こと。旦那を名代に立てはどう瞞めふとも自由なこと。かの新七のいきずりめ、お爲顔で旦那をひづめ、家久しい我等を押退け、一人威勢を振はふと仕居つた

てんどー出る
所、お上の事

あつきー困しま
ふみかぶるー罪
を身に負ふ

浮世小路ー駕籠
の立場

を、旦那へ吹こみ、まくし出してのけたが、聞けば大坂に狼狽て、此惣兵衛と公事のみや
のと叶すけな。あはれでんどへ出やれかし。五畿内をせいて見しよ。今の間にござきさけ
て心からの非人仇討。どこぞそこらの橋の下新七は居やらぬか」と、口合悪口潜上はり、ど
つと笑ふて通りけり。新七どふも堪へられず、胸を按り沈めて見ても、律義一偏に眞直に、
一筋な若い者、末の事も思はれず、切てくれふと飛で出る。女房抱つき、「是ことな人、女夫
の者が世話やくは、勝二郎様へ御意見申す爲ではないか。あいつ一人切たとて、お主の爲
には何がなる。新七が言分なく身のあつきに切たと、皆手前のふみかぶり。無念を堪へて
お爲になり、親旦那様の御恩をおくる心はないかいの。其様に短氣では私や心元ない」と
恥め止れば、新七「夫も皆合點理が非になるとは知たれども、今の悪口聞ぬか。彼奴が此
前親旦那の悪性金を、十四貫目横取して曲事に遭ふ筈を、兎や角己が精力で沙汰なしに
事済んだ。其時には命の親と手を合せて拜んだ。夫から十年たよぬ間に、少しも爲になり
そふな古い手代を嫉み出し、恐くすどしい此新七に無い難つけて暇出させ、旦那の身代空
にして今の様な雑言。仲上つた頼見れば火に入る事も思はれぬ」と、涙を流すぞ道理な
る。時に揚屋の上する女子下男、門番起いて、「少門を頼みます。是は此方の大事のお客、浮

息杖―息をつく杖

世小路迄お歸りじや。きつう酔て御座んすゆへ、斷り云ふて内からお駕籠にめさせます。氣を通して下んせ」と、云ふより早く門番「皆迄云ふな合點じや」と、窺開いて目を眠るも、日頃の金の威光ぞかし。夫婦すはやと橋詰にて、駕籠の後前しつかと捉へ、「お駕籠待て下され」と、引留れば駕籠の者、「ヤアこりや狼藉して、息杖の胸打をくらうか」と振上る。新「狼藉は致さぬぞ。旦那のお爲に致す事。擲ば擲て殿かば殿け。旦那へ一言申さぬ中は、駕籠をやらぬ」罵「いや放せ」罵「いや遣ぬ」と捻合ふ勢ひ、駕籠を横に打明けて、駢ながらの勝二郎、橋板をころくくく、川へ落とす所を、お半ちやつと引起し後を抱へて膝の上。一昨日からの酔醒す、女郎の小袖を打かけながら、舌も廻らぬ夢半分、新「太夫爰まで送つてか。エ、かたじゆけなんきんの八幡酒には酔はぬ。今のは兼平の能の手、木曾殿が泥田へ踏込れた所。詰末しら雪の薄氷、深田に馬を駈落し、引ども揚らず打てども行ぬ望月の、駒の頭も見えばこそ、こは何とならん身の果。いやはアなんと面白い事か」と、ひよろひよろ正體無りけり。半「申し旦那様、是はどふしたお身持ぞ。お前のお影で榮耀する今夜の人も大勢あるに、お駕籠に一人附く者ない。是れが江戸屋の勝二郎様のお行儀とは言はれまい。私が男の新七にお暇を下され、お出入さへ止められたれど、眞實お爲になる者は

熊手—怒深き女
をさす

番けな—反對
に云ふ

お家で新七ばつかり。御身上のがいをなす惣兵衛めと新七と、思ひ替て下さんすはお馴染とも思はれぬ。其上忘れはなされまい。前方私御奉公致した中、お寢間へ來いのお傍に寢よのと人頼み迄あそばした。私は一ツも年重なり、若いお主を唆かす、熊手よ慾よと言はるゝも口惜し。奥様お呼なさるゝ時のもじやくじやも如何と、お暇を乞ましたれば、心ざしを感じた、さりとは女子に奇特者。あの新七といふ者は、親茂庵不便をかけ、我子の如くせられて、兄同然の新七と夫婦にして、一生見捨ぬお約束。其新七を追出し、仇の様になさるゝは、其時から私を憎さに夫婦にあそばしたか。憎まるゝ覺はなけれども、お心に從はぬ恨を、杵であたり、杓子であたる御仕方か。但は今にお心残り、悋氣故の憎しみか。夫なれば猶汚い氣。何が悪ふて新七が御意見は御意にいらぬぞ。頼もしいないお主様や」と、涙を溢さぬばかりなり。實に酒の酔本性忘れず、お半を突退け、勝因縁咄をきをらう。新七めが意見聞きたふない。己が親父はな、一年に八千兩九千兩宛、三十年遣はれたれども遂に浮名は立なんだ。こちらが身代で五百兩や千兩遣ふたら何じや。ナア慮外ながら夫を新七めが、遣ひ潰すの身持が悪いのと、一門一家町年寄庄屋まで觸歩いて、藏々に封を附けさせて阿呆者にしてくれた。忝けないことの。何じや和女に心が残つて悋氣じや

名物云々(以下)
ある金の鶴

あ。おけよ、尤も初は惚て居た。けれども今新七めが喰汚して、裏までかやして喰さがいた物を、此方所望にござらぬ。ア、慮外ながら新七めが口故に、揚屋の届けも無沙汰になり、若い者の一分を捨ふとした此恨は盡きせぬ。勘當の上の勘當じや。サア駕籠やれ」と、乗んとするを新七飛出繩り付、「お情ない旦那殿、何とて左様に邪にお聞きなさるよぞ。新七が御一分を捨たとは恨しい。捨まい爲の御意見。金の事は申さぬ。千兩が萬兩でも金程づつの、お身につくお慰みが有るにこそ。惣兵衛めが計ひにて、もがり共を太鼓につけ、十兩の物入を百兩に附たて、九十兩は分取にして阿房にして笑ひますが、こなたは御存じござらぬか。吾妻殿の身請の金も、私お家にある時分七百兩と申す金惣兵衛に渡した。其上に此度名物のお家の道具、京三界質に置き、二千兩餘の御借金が出来たけな。旦那には借金させ手代の惣兵衛屋敷を求め、お出入の醫者浪人田地買ふたり銀かして、分限になるが御存じないな。御念比の醫者はあれど、善悪をかく鼻がきかぬ鼻缺醫者が、入残しの目薬でもお目が明ぬか情なや。此新七めが親は大和の貧乏人、幼少の時藤田小平次と申した狂言役者へ、奉公やら養子やらに參つて女形を致したを、親旦那のお蔭でお家へ參り、手代並になされしが、さすが育ちが恥しい。算用算勘存ぜねば、何を

奉公御恩を送らふ様はない。律義を我身の奉公にして、お爲にならふと存ずる一念、五臟六腑に染込でお主を大事に存じます。茂庵様の御臨終、勝が事を頼むぞ。お氣遣をなされなと請合した甲斐もなく、斯様にお身を持つぐさせ、佛へ言分何とせふ。お墓所へ参つても、顔ふりて戒名を碌に拜みも致されず、涙に沈み居まするわいの。夫さへあるに此盆から、お前からの言付か惣兵衛めが、私が若旦那の勘當の者、お旦那の墓へは参らすなとお寺へ急度言付け、挿た花も取捨て、手向の水迄打明けて、未來に在す旦那にさへ疎ませふといふ事か。お爲を思ふ新七が左程お氣にいらぬは、水と火との合性が、餘りと云へば曲がない。そふではない若旦那」と、主の意見の恨泣、詞を過し推參云ふ、涙は主の藥ぞや。勝二郎大酒の上猶々氣にや觸けん。「ヤア意見云ふも所がある。途中に駕籠より引ずり下し、恥かよせて意見せよと親者人の遺言か。サア此慮外の言譯があるか聞ふ」と怒らるよ。斯は申し勝二郎様、密かに御意見申さふも、門詰も踏されず、取次申す者はなし。よしお屋敷へ伺候して六尺共が手にかゝり、打殺されふば殺されふ、主従の冥加は忘れまいと、朔日廿八日には御門に禮して罷歸り、さもなき時にも月の中に二度三度臺所の口まで参り、傳手さへあらば内證から申上んと存すれども、さりとは人はつれないもの、古への

冥加引合と云ふ程の趣

はかり一限り

あま逆ま一天地
反覆

しやまだるい
しやは黒壁、ぐ
づぐづするな

傍輩ほうはいも見ぬ顔し、目をかけて引廻した丁稚小者飯焚まで、詞ことばをかける奴等やつらもなく、馴染なじみとて可愛めづや、白犬しろいぬが見知みしつて尾を振てしなだれる。犬に劣おとつた畜生共ちくしやうぢもらむまいとは存ぞんずれども、凡夫心ぼんぶしんの淺間あさましさ、無念むねんでならぬ女房共にようばら」半「エ、口惜くちやくい新七殿しんしちだん」新「但し我々僻言ひがごんならば、親且那おやぢなの魂魄冥途こんはくめいどうから蹴殺けころいて下されかし」と、夫婦は橋はしに平伏ひらふして聲こゑをはかりに歎なげきしは、不便ふびんなりける心なり。酔醒よせめの氣きは上のぼる、ぐつとせいて勝二郎かつじやう、「オ、親父おやぢ迄までもないこと。身みが蹴殺けころいて見せんず」と、飛懸とびかけつて引伏ひつふせ、胸骨むねほねをさんぐに踏ふみ付つける。女房にようばら「是はお情なさけなし」と取とつけば、新しん其儘そのままをけ、手向てむかひすな。お腹はらの愈いる程ほど踏ふみせませ」勝かつ「オ、踏ふみいでおこふか。重かさねて斯か様な慮外りよぐわいをせば、下々したしたに打殺うちころさする、用心用心せよ。駕籠かご持もて來きい」と打乗うちのりるも、腹立はらたち紛まれ譯わけもなく、後向うしろくやら前向まへくやら縦たてに乗のりるやら横堀よこほりを、「急いそげく」と走はしらせし若氣わかけの程ほどぞ笑止せうしなる。新七しんしちは齒齧はがみをなし、「エ、く口惜くちやくい無念むねんな。あま逆さかまの事ことにても、主まに踏ふみれて恨うらみはない。傍輩ほうはいの言ことなし故踏これたと思おもへば、腸はらわたが燃もるかへる」と、橋板はしいたた毟むしき欄干らんかんも握にぎり挫ひしぐばかりにて、涙なみだに眼まなこも眩くらみしが、「よい合點あてんじや。思案しあん有り」と、駈出かけいづるを女房にようばら繩すなつて、「思案しあんとはどふぞいの。短氣たんきを出ださすと待まちしやんせ」と、引留ひきとどれば、新しん「しやまだるい。最前さいぜんに惣兵衛そうべゑめ斬損きりそなふたも女房にようばら故ゆゑ。短氣たんきも短慮たんりよもいることか。思案しあんは此胸このむねにある」半「サア其思案そのしあんが

くらはすーなぐ

嬰食ふー襖は嬰
食ふ獸ゆる博勢
町に擲けたり

守口、佐太、占
野、枚方等ー京
街道の屋名

太郎ー井筒屋の
亭主

皮切ー灸のすゑ
始めにて事の爲
始めにいふ
うんだー倦だと
灸の跡隠んだと
かけたり

いとしばやーち
とはしの暢

聞きたい」新「いや是れ計りは儘にして放せ」思案聞ねば放さぬ」くらはするが放さぬかと、男思ひの女房と、主思ひの男と、誠餘りて掴みあひ、女夫争ひ犬くはぬ、犬の恪氣に威されて、辻の番太が夢くらふ、ばくろふ町をぞ三重歸りける。請出すといふ其日より、衣裳をも皆町風に、縫はりの茨木屋より嫁入とて、婿は八幡の岩清水、あびせませんと井筒屋の、亭主は送る傍輩の太夫天神饒別を、持せ遣手の杉重に樽の名酒をもり口や。さだの煮賣を見る事も曲輪で成ぬたのしめ野に、紅葉たけくなべが茶屋、枚方樟葉是も又、吾妻請出す山崎見ゆる、そつこで乗物たてにけり。吾妻乗物の籠をあけ、「是太郎様、最早八幡も近いけな。兼て鯉様道まで迎ひに出やんす筈。そこを此方から先越てによつと押かけてはどふござんしよ」太「八幡太夫様是はずんど洒落ませふ」吾「そんなら頼と菅笠で供やら主やらごちやくは面白かるく飛おりてア、氣が晴れた、わつさりと嬉しや。そばで山見たも、勤の皮切こらへた故。憂汐うんだは身のやいと」十四の冬より今年迄、夫に染たる風俗は、いかな家にも走り出て、お山見じと目をつける。上から下る魚荷の戻り、歩きくの高咄し。甲「扱々浮世は知れぬもの。江戸屋勝二郎と云ふては、石火矢でも崩れまい長者の家と云ふたれ共、咸陽宮も亡び時、一時の間にいとしばや。彼も言はば金故。生

中持ぬ我等しき寢覺が樂じや」といふ跡から、乙「科は何じや知れぬが、勝二郎は追放で八幡は熱る己や見て來た」甲「百兩や五十兩は彼でも取て退ふか」乙「何のいの編笠さへ被せぬもの。請出された吾妻とやらどふなる事ぞ。可惜物安ふて此方へ貰ひたい」何の彼のと悪い沙汰、口々言ふて通りけり。吾妻ふつと耳に立て「太郎様今のはどふぞいの。いやな沙汰でござんす」と、氣遣がれば、供の下女駕籠の者まで色違へ、辨當もちもくひさげぢう、喉に詰りし餡餅の案に相違の顔付なり。井筒屋も氣にかよれど、氣落させじと、「これく粹の様にもない、あれは人の法界悋氣。太夫様を見知て、氣遣かけて面白がる嫉で皆云ふ事。ぎゑん直しに酒にせふ。毛氈敷け」と勇んで見ても、どこやら體が明櫛の、底の心は澄ざりけり。吾「あれく彼處へ泣きく走つて來る人は、勝二郎様のお草履取佐五介ではないかいの」と、言ふ所へ、佐五介息もきれく、「なふ太夫様、ひよんな事が出來ました。私やなんと致しませふ」と、泣て詞も無りけり。吾「扱こそ噂に違ひはない。ちやつと様子を咄してたも。泣て居てすむ事か、信と性根を附やいの」と、叱られて涙をとめ、竺事の起は皆惣兵衛め、旦那をいとしいくと吐いたは己か慾。お金には御一門の封が付て自由にならず。結構な茶入懸軸お家の寶黄金の鶏まで、京で質に置くとて、なんとやら申す位高いお公家

よみ人未らず
公卿は歌詠む故
云ふ

しやうど一先
途、目あての事

むげない一編茶
な

様の姫君を、勝二郎が嫁に呼ぶ其物入との言ひ立。その公家様のお袖判を偽判し、金の取手はよみ人知らず、大内方より御穿鑿、科人は惣兵衛一味のあひすり十人あまり、粟田口にて獄門にかゝる筈。手代の業とは言ひながら、名指所は勝二郎、存ぜぬとは言譯立ず、金銀財寶山田島、京大坂方々の家屋敷迄取上られ、着の儘での御追放。何所をしやうどにござらふぞ。腹の内から今日迄、荒い風にも當らぬお身、さぞや途方があるまいと、思へばいとしう存じます」と、語れば一度に手を拍て、惘れ果たる其中に、吾妻一人の物思ひ、「兎角私の不仕合」と、餘の事言はず泣き居たり、井筒屋も溜息つき、「お笑止とも氣の毒ともいふた計りで爲ふ様なし。太夫様は先お歸りなされませ。殘金二百兩八幡の馬おりに請取る筈。惣兵衛とつうくつ致し、茨木屋をば私請合、手形の上で今日お供仕り、斯様の御難儀出來の所、うかく八幡へ參つても、貳百兩の金子誰から請取り申さんやら、お笑止ながら太夫様を茨木屋へ渡しませねば、我等が手形消へませす。世間にはつと知らぬ内、早ふお歸りなさるれば、私が爲と申し、太夫様もお首尾よし。サアお歸り」と言ひければ、吾妻わつと泣出し顔をも上す居たりしが、「むけな言分して下んす。歸れなら歸れで濟む。歸れば吾妻が首尾よいとは、左様した吾妻じやないはいな。可愛ひ男の流浪し

忘八―揚屋

風呂屋―湯女の
ゐる所
じめんづく―面
と向きあつて
嘯、微塵―共に
少しもの意

たのを聞きながら、身の首尾を思ふ様な傾城じやと思ふて下んすは、曲がない情ない、忘八の譯が立ぬとて、兩度曲輪へ立歸り、身の恥は扱をいて、勝二郎様の恥辱は是が何と雪がれふ。こなさんの請合は私が命行る限り、みぢんも難儀はかけますまい。新町ばかりが傾城町であらばこそ。京の島原奈良伏見、茶屋風呂屋へも身を賣て、美事に譯は立ませふ。世に落やうが何様しやうが、勝二郎様の女房になる程の吾妻じや。じめんづくに頼むからは、雫も是に偽りない。再度新町の勤をのがれ、勝二郎様の一分立て下さんせ。是手を合せて頼みます。ほんにく此よな事降湧ふとは夢にも知らず、伊勢兩宮へ太々神樂、愛宕清水住吉様へ金燈籠、八幡様へ萬燈、其外神々宮々へ、烏居立ての何のて、金のいる事厭はずに、神佛への約束も今では違へる身と成果て、人間どしの遠契約は騙りの様にも思はんしよ。夫が悲しうござんすと、歎き詫たる口説言、眞實見へて哀れなり。揚屋もさすが只者ならず。太「よい〜二言と御意なされな。義理詰になつてきた。茨木屋の手前は此太郎が請取た、手形一枚なされいでも、今の涙を手形にして、お前を爰で手放します。お身をどこぞへ片づけて二百兩お立てなされませ。契約お違へなされても此方からは尋ねませぬ。勿論催促仕らぬ。是から互の心底づく」と、切放れたる詞の末、吾

それは定か有難い。胸が些とはひらけた」と、伏拜みてぞ泣き居たる。時に向ふの堤の上、大勢人の喚く音。追放人の作法とて、八幡公文所の役人数多、手々に割竹大地を叩き、勝二郎を先にたて兩手を引ぱり、聲をかけて追拂ふは、忌々しくも三重 凄まじし。憂事知らぬ和子様の、氣を奪はれ性根をとられ、起つ轉んづ足たよす、橋本の宿はづれ、三國境の板橋にこそ着にけれ。荒けなき聲々にて、役人「サア此所より追放す。京大坂淀伏見境をそへて住居叶はず。背くに於いては見逢次第打捨、何方へも失おれ」と、口々罵り歸りしは、硫黄が島に捨られし俊寛僧都も斯くやらん。往來の人も目を明て、泣すに通る人もなし。役人歸れば駈付て、吾「是れ私じや吾妻じや。不慮な難儀が出来ました。去りながら大事な命が寶袖乞非人の身となつても、二人一所に居る上は堪能ではあるまいか。忘八への出入も爰なお人の男氣故、御苦勞かけずに埒明く筈。様子は靜に物語る。哀しむこともなんにもない。けくで浮世が面白い」と、笑ふて見せて力をつけ、涙を隠せば顔をあげ、勝「委しい様子は聞ねども、太夫が殘金埒あくとは井筒屋殿の親切、生中禮は申さぬ。エ、面目ない此勝二郎は下人の罰が當つた。大賢人の新七が意見をを用ひず勘當し、身の仇となる惣兵衛めに誑され、新町橋で新七を足にかけて踏だる罰。忽ちあたつて此仕合。身の先行

手ぶりー手ぶろ
と云ふに同じ

あぢな一雙な
五尺いよこの一
松の落葉五の巻
にあふ歌、いよ
は拍子
さまがみやげー
此歌も松の落葉
四の巻にあり

のする事は今生で思ひ切たぞ。先の事は知らねども、先は此世の暇乞と、思ふて損のいかぬ事。何れも去らば」と立出る。井筒屋袖を引とめて、「何方へお出なさるとにも當分の御入用、路銀の餘り少分ながら御懷中」と差出す。手を付け一寸戴いて、勝「志は千萬兩金子は申受まい。親祖父の貯へを冥加も知らず遺捨て、金の罰があたつて金銀に疎まれ、手ぶりになつたる我なれば、此度倍と身を懲し、一錢得難しと云ふことを、我魂に思ひ知らせ、貧苦の修行の稽古の爲、金銀とては貰ふまじ。去ながらはつとり煙草煙草入、煙管の餘計あるならば、一本所望申したし」太「ア、お安いこと々々。煙管のらうは細くとも、お心を太ふして心中などあそばすな」勝「いやるがくだい。不足なふて死ぬること、ほんの誠の心中なれ。金に詰つて心中する勝二郎でない證據、薬も少々貰ひたい」太「實に是は御尤、懷中至寶の一包。薬屋は命堅い石見の掾」と祝ひければ、遣手の杉が太夫様へ花色繻子の前巾着人參いれてお饒別。仲居の初は延紙二折、「ちよつと假寝もあるもの」と、あぢな所へ氣をつくる。駕籠の衆の仲間から、三尺手拭抱帯とて進上す。是はかの「五尺いよこの手拭」と歌に諳ひし手拭か。是れは又加賀菅笠締緒あらくと召ませとよ。けにも誠の志、「さまが土産の菅笠」と、踊に踊りし笠よなふ。それは吾妻の花嫁子、是は吾妻が身請の果、腰をよぢらす

供もなき、紋日の夜床引かへて、禿もつかぬ草蒲團。夜見世の太鼓音たへて山寺の鐘の聲、早こうくと響けども、我迎ひにはいつ來ふぞ。「お二人まめで中ようて随分無事で御座舟で、迎に參る男山八幡の弓の弦きれず、便を待つぞ」驕待るよぞ」「さらばく」と泣く聲ばかり、耳に残りて面影は雲に消へけり。

あづま 初もめん
勝二郎

春の夜云々一松の落葉六にある歌をとりたりくだかけ一鶴心にかこち草心に不平を起す

木枯の森一地名、身を枯すにかく吉原雀一よしきり

春の夜の夢驚かすくだかけの、其しだりをのむすほほれ、とくる思ひはいつかはと、いはで心にかこち草、根引にせんと言替す、身は捨草の捨もせで、浮名は流れの淀河や。何をたよりに水鳥の、波にゆらるゝ世の習ひ、疎きは人の情なり。廣き世界は廣けれど、京や浪花の住居さへ、せき留られし水車、月の影さへくるくと、彼方此方に汲わけられて、行けば丹波路戻れば大和、行くも戻るも二人連、女夫鳥のとほくと、昨日のねやの花紅葉、今朝ふる霜に朽そめて、身をこがらしの森の下道。憂しほ踏むもあじきなき、馴れし古郷の草も木も、今の名残をとどめかね、まてくと啼く吉原すどめ、よしみくくの言の葉に、誑され渡る狐河、空に暮せし年月の、榮花は夢の盃の、酔醒枕、それ

寶寺—山崎にあ

女郎花—吾妻を

さす

りんき云々—悟

氣辛氣

男山—勝二郎を

さす

光る君—源氏物

謂の主人公

六十帖—源氏物

語の巻數

十帖—宇治の巻

はんま千鳥—濱

千鳥

えひもせざ—乾
もせぬに寄す

初名月—九月十
三夜の月

は若草身をうらみ草。なんの和女に飽たではなし。飽も飽れもせぬ中の戀と命が寶寺。昔の里の寢寢には、伽羅で暖む床の内、起別れゆく曉の、袖から袖に手をいれて、出口の風の寒からず。今の憂身の旅寢には、じつと寄せたる肌と肌、吹わけて吹く山おろし。籠に立る女郎花、りんきしんきと艶きて、くねる心の男山、いとし男を古への、世に引返せ弓八幡。神に暇と伏拜み、東を見れば名にも似ず、月こそ出れ朝日山。山吹の瀬に影見へて、渡つたく、光る君の渡つた、夢の浮橋六十帖を渡り詰十帖と詠じた。一に一夜のお情の夕顔の若ばへ。二に香たきしめて浮舟にかけろふ。紅梅竹川橋姫に手ならひ、我名床しきあづま屋でこれ様の忍び寢。世も忍ぶ人目も忍ぶ道芝に、駕籠かるすべも白妙の晒干すてふ槇の島。はんま千鳥も友を呼ぶ。我は伴なふ人とて、なき顔隠せ笠取山。隠すとすれど心なや。宇治の河霧たへぐに、あらはれ渡る網代木の、河瀬の水に袖ひぢて、互に影をみづ鏡。吾「やつれさんした」勝「やつれたぞ」明離れぐのあの雲見ればく、明日の別れが思はるよ。憂き我が身はいろはの文字よく。袖に涙のゑひもせず。木の葉散りぬる木幡の里、徒歩で是ほど行くことも、はつめい月や一口、堤づたいの長繩手、續く里々山々も、皆近付の山なれど、今日の憂身は心から、さぞ見ぬ顔と袖覆

ひ、袂を覆ひ笠覆ひ、空を覆へば冬の日の、最ど短かくはや暮て、夜は長池の水の泡、水の淀に我もとて、よどみ息らひ明さるよ。

下之巻

木辻一奈良の遊廓

中年四年一年長
けて四年の勤
命がらり一命ぐ
るめ

しなだれ一はな
れぬ
諸分一色の道も
よしと掛けたり
沖津白波一伊勢
物語の歌をとり
て、盗人の如き
帯間も連れずと
の意をいふ

奈良坂や木辻も戀の札所にて、女郎屋揚屋三十三間昔の京の八重櫻、九重薫るこむらさき、小藤を爰の四天王、續く勢こそ無りけれ。哀や吾妻は義理合の金の契約もだされず、此里一番名の高き山城屋といふ忘八へ、中年四年二百兩、命がらりに身を賣て、大坂の埒は明たれど、又傾城とならざらし、堅横沙汰を聞きふれて戀の大和の色好、吉野の花も振り捨る三わの索麴喰付て、買ふ人餘れど賣る日は足らず。中にも立田の藤と云ふ、しなだれ男纏ひ付、揚屋も諸分吉田屋の、仁三郎を定宿にて二階を一間宛がはれ、命有たけ首尾有たけ、金有たけと勤むれば、四天王の名取をも、今の吾妻が下に見て獨り武者とぞ流行ける。藤も在所に稀男、吾妻に深く染附の、龍田や沖津白波の太鼓も連れず、今日も又、通ひ木辻の吉田屋の藤仁三内にか。ヤア妓様達歴々のお寄合。おてき様の待合、我等が座敷へも少貸して下されかし」と云へば薫小紫、「珍らしい藤様の外の女郎をから

しんきのわく
粟が湧く

しらがー知らず
にかく
起縁ーえんぎの
よき

ぶせいー精出さ
ぬ事

んすか。男の心の一筋に他へふれぬは、傍から見ても憎ふない物なれど、こなさんと吾妻様とはあんまりで小腹が立つ。しんきのわく程浦山しい。見ぬが増じや。戀のめんく稼ぎじや」と、ばらく立てぞ入にける。仁三郎忙しけにしよこくと立出、「ヤア藤様いづから爰に御鎮座。手でもお拍きなさいいで、夢にもしらがの母者人、藤様のお出じや。吾妻様の御氣色も今日はお快よさそふな。申し醫者の名も起縁の物。始は西の京の道偏と申す醫者の藥で、どうへんに有た所を、昨日から三條の元喜と申す醫者で、めつきり元氣が見へました。御祈禱を本服院息災法印を頼みませふ。銚子々々」と手を拍く。藤「是はく吾妻が氣色快いとは、あたまで善事聞初た。去ながらあの病氣は、彼の江戸屋勝二郎が昔を忘れぬ物思ひ。根引に此方へ取たれば氣がかはつて達者になる。そこには氣遣ないこと。是に付ても一刻も早ふ請出したい。四年の年を三年遣ひ今一年の所を、元金の貳百兩で請出そふと云ふからは、親方も不足ない所。エ、親子の衆がぶせいな。餘所へ取られて此藤が一分立ず、死なねばならず。今日は金を突つけて是非とも詫て貰ふ思案。耳を揃へて懐申した。是袖口から手を入れて、虚か誠かは見や」王「どれく、ホウくく可愛らしい小判女郎。是はきつい詮索。扱油斷とお恨みなさるれど、前髪もある私が親程

な山城屋、算用だても申にくし。母妙慶を遣まして、割つ砕いつ言はせて、さらりつと
 埒を明け、只今お知らせ申さんと、硯引よせ墨をすり、鹿の巻筆妻戀鹿、鹿は春日の藤様
 め、果報者め金持め、あやかり者めと騒ぎける。勝「それは大慶先吾妻に逢たい。呼でたも。
 何所にぞ」与「いつもの二階に御座ります。これ林之介、吾妻様呼びまじや。吾妻様、太夫様、
 林之介」と、呼つても返事もせず。与「是はどふじや。又例の勝二郎といふ淀鯉を、思ひ出し
 て泣いてかな。鯉が付て居るそふな。鯉なら煎餅まいて見よ。いや手拍子を打て見よ」心得
 たんくたんくたん」と手を拍ば、心浮ねど身の勤、悲しい顔を見せまいと、わざとに
 こくくわさくと、二階の口に立つを見て、「そりやこそ鯉が現はれた、盃をさしみにせふ。
 爰へちよくと御いり酒、甘いことじや」と喚きける。吾妻二階に腰かけて、「是仁三様、たん
 と口があがつたの。あんまり鯉々言はんすな。鯉も瀧へ登つめ、今ではどふも下はがな
 惚じて鯉と云はんすは勝二郎様故かいな。彼様は八幡の人、八幡に鯉は有るまいが、合
 點がいかな」と云ひければ、与「それならば今日よりごんほ様と申そふか。妓様にごんほは
 いかど。ヤア夫も大事か。かがのごんほと云ふこと有り。そんならいつそう毛ごんほ様、追
 付旦那の引拔ごんほ、目出度いごんほ」と座をもてば、吾「エ、憎い口や敲ごんほに仕たい

ちよく一階口に
 ちよつとを掛く
 口が上る一階口
 が上手になら

午男一八幡の名
 産

夫も大事か一夫
 も一向權はぬ

取しづめ―取り
とめ先に飲込ない―
藤が聞入れぬ

ぞ」と、二階降るも勇まねど、表面ばかりの笑ひ顔、云ふて泣くより猶憂し。藤も彌々機嫌よく、「今日は嬉しい事揃。第二和女の氣色もよし。仁三親子の働きて身請の埒が明たぞ。懐中した金子を里に残いて、和女の身と兩替して、一兩日に吉日極め龍田へお供仕る。サア、二階で酒々。吾妻はこれのお母へ能ふ禮云ふて跡からをじや。仁三此方へ」と手を引て奥の二階へ上りける。吾妻は「はつ」とけでんして「夢見た様な事どもやな。根引にするの請出すのと、取しづめもない潛上は、十人が十人で思はれたさに云ふこと。何處で帶さへ解ぬ身によもやと思ひ、頼みますると偽りしを、先は正直喜んではや談合が極まつたか。扱も胸をついたこと誰にとふと談合せん。勝様からは便宜もなし。サア今でも出ると云ふ時には、泣き口説ても叶ふまい。其際にならぬ先、とんと打明け云ふたらば、義理詰に詰られて、思ひ切ることとも有る」と、階子半分上りしが、「いや、くひよつと言出し先に飲込ない時は、勝二郎様のお爲まで取返しのならぬこと。ア、云ふも厭なり、言はねば悪し。罪深いことながら今の間にあのお人の、身に妨げも出来よかし。此病が募れかし。今夜の夜が常闇と明すにあつてくれよかし。身請の時が延したい」と、咎なき天にも難をつけ、歎き恨むる世の憂さ。我身ながらも淺間しやと、とんと伏て泣き沈む、涙も階

一度は榮え云々
| 諸州杜若の文
句にて末の句よ
り吾妻につゞけ
たり

うりへぎ―高賣
したる備高

賣らさいでも云
云―賣らても大
事なかりし
坂田藤十郎―嘗
時の名優
手夕霧―夕霧の
手芝居

子を傳ひけり。通ふ心や格^{かう}子^し前^{まへ}、耳^{みみ}にこたゆる謠^{うたひ}の聲^{こゑ}、「一度は榮^{さか}へ一度は衰^{おとろ}ふる理^{ことわ}りの、誠^{まこと}なりける世^よのならひ。住所^{すまひどころ}求^{もと}むとて吾妻^{ごさい}の方に吾妻^{ごさい}の方に、吾妻^{ごさい}々々」と謠^{うた}ひ忘^{わす}れた顔^{かほ}つきで、我^{われ}名^なを呼^よぶは知^した聲^{こゑ}と、行燈^{あんどん}の影^{かげ}から表^{おもて}を見^みれば、戀^{こひ}し床^{ゆか}しの勝^{かち}二郎^{にじろ}。飛^とたつ様^{さま}に懐^{なつか}しさ。表^{おもて}には人目^{ひとめ}あり、夫^{おつと}から廻^{まわ}つてかうくと、指^{さし}で教^しへて招^{まね}かれて、小暗^{こくら}がりをばそつと抜^ぬけ、つつと通^{とほ}れば緇^{すけ}つき、吾^{われ}なふ能^よふ來^きて下^{くだ}んした。逢^{あひ}たふてならなんだ」と、しつかと抱^だ締^ぢめ泣^なき居^ゐたり。よい衆^{しゆ}の果^みの流^{なが}石^がにて貧^{ひん}苦^くを貧^{ひん}苦^くと思^{おも}はばこそ。勝^{かち}此^{この}形^{なり}を見^みてたも。思^{おも}へばく不^ふ算^{さん}用^{よう}。和^わ女^{にょ}の身^みを賣^うする程^{ほど}ならば、三^{さん}百^{ひゃく}兩^{りやう}もして遣^やつて、うりへぎの百^{ひゃく}兩^{りやう}も手^てに持^もたがよい筈^{はず}。大^{だい}坂^{さか}の親^{おや}方^{かた}へ二^に百^{ひゃく}兩^{りやう}渡^{わた}さねば、井^い筒^{つつ}屋^やの太^た郎^{らう}左^さ衛^ゑ門^{もん}と約^{やく}束^{そく}の義^ぎ理^りが外^はるよ迎^{むか}ひ、差^さも引^ひもなふきつと堅^{かた}ふ二^に百^{ひゃく}兩^{りやう}に賣^うらさいでもだんないこと。此^{この}鈍^{どん}さから此^{この}つら。何^{なに}にも得^{とく}は無^なれども、坂^{さか}田^た藤^{とう}十^{じゅう}郎^{らう}が夕^{ゆふ}霧^{ぎり}を、ま一度^{いちど}見^みたいと思^{おも}ふたが、此^{この}紙^{かみ}子^こで手^て夕^{ゆふ}霧^{ぎり}を仕^{つか}る。セリフ太^た夫^{ふう}又^{また}逢^あひに來^きたはいの。サア和^わ女^{にょ}も爰^{こゝ}で泣^なや」と云^いへば、吾^{われ}ア、泣^なく分^{ぶん}は夕^{ゆふ}霧^{ぎり}に負^まはせまい」と泣^なきければ、男^{おとこ}も心^{こゝろ}しほくと、可^か愛^{あい}やく、物^{もの}真^ま似^にに誠^{まこと}の涙^{なみだ}を紛^{まぎ}らす。奥^{おく}二^に階^{かい}より手^てを拍^たき上^あり、禿^{かぶろしゆ}衆^{しゆ}、吾^{われ}妻^{さい}様^{さま}呼^よびましや、吾^{われ}妻^{さい}様^{さま}々々と呼^よぶ聲^{こゑ}す。吾^{われ}それ人^{ひと}が來^きるア、しんき、どこへがな。是^{こゝ}々^々火^か燵^{たつ}へ隠^{かく}れさんせ」と、蒲^ふ團^{だん}をあぐれば勝^{かち}二^に郎^{らう}、「此^{この}夏^{なつ}爰^{こゝ}

天啟鬼宿日一被
上旨日

の芝居へ竹本が弟子が下つて重井筒を語つた。サア是から夕霧代つて重井筒火燵の段。セリフ北濱邊のよい衆は火燵に水を入れます。紙子一枚の我等は逆もの事に、火焙になりたい」と蒲團とつて引被る。仁三郎二階より障子をあけて、「申し、吾妻様、只今曆を詮索すれば明日は天啟鬼宿日、萬事揃ふた大吉日。銀はお身に附てなり、何に不足ない上は善は急げ明日の朝、目出度ふ曲輪を出します筈。その用意なされませ。飲ふぞ、大きな物で飲でくれふ」と障子引立て入にけり。火燵よりむくく起、勝「今のはなんぞ、曲輪を出すとは善か悪か氣遣な。聞きたい」と氣をせけば、吾「サアされば夫故胸を痛めること。先度の文にも云ふ通り龍田の藤が事い。作病發しつ振つて見つ、色々飽ると工面して、退く様に仕掛ても煩惱の犬かして、爰の妙慶挨拶にて請出す談合極まると、聞くから胸が騒ぎ出し今に心が落付ぬ。どふした物で有らふやら、最早智恵にも能はぬ」と、泣くばかりこそ力なれ。勝二郎も泣出し、「扱もく、悪い事も續けば續くものかな。五年以前に在所を出で、無量の憂さに遭ふたれども、諦らめつ慰めつ心で埒を明けたるが、命かけた和女を人の物になす悲しさ。二百兩といふ大敵には、弓鐵砲も叶はぬ」と、齒を咬しばかり歎きしが、「左右云ふ間に夜が更る。もふ分別は無い所。和女も死や己も死ふ」と、若い同士

ハツ午前二時

丹波越一騒落の
事東海道名所記
にあり
不道化一もどけ
だくく〜ドヤ
ドヤする

仕済いたしめ
た

は氣を嗜み、死を先立て涙を隠す歎きの色こそ哀なれ。吾妻死身と胸を据へ、「これ申し勝二郎様、死ぬる覺悟に極まらば、死なずに免るゝ思案あり。こなさんは先お歸り、内を仕舞て夜中過、八ツの時分に又ござんせ。金調へて置ませふ。其金持て丹波へ退き、來年私ねんまへが年前に迎ひに來て下さんせ。心安ふて出らるゝこと。早ふ去でござんせ」と、叫こゝろげば勝二郎、「それは至極の才覺。其金は借か貰ふかどこから出る」吾「はて夫は構はんすな。悪い様には仕ませぬ。早ふ往でござんせ」と、せがめば領うらづき悦んで、勝「是ぞほんの丹波越」と、不道化云ふて忍び出る、氣の悪さも育そだちから憂事知らぬ證かや。吾妻はほんの出來心ふつと云ふたは云ふたれど、是からが大事の思案。火燧の櫓を談合柱。腹のつかへだくく〜と胸に踊るを按りさけ、「二階の客を刺殺せば明日の難儀を脱るゝと徳。金を取れば勝二郎様のお爲になる是が徳。是程よい事有るものか。足元によい思案、こけて有るのが見へなんだ。殺して退ふ」と思ひ立、目の前ばかり背中を知らぬ、女の智慧こそ果敢なけれ。夜は何時ぞ臺所は夜中を告る躰も有り。更行く儘に恐氣立、膝の慄ふを踏締々々、階子の口から覗ひて見れば、客は酔て前後も知らず。仁三郎がうはき酒いき倒れては性根つかず。吾「サア仕済いた」階子三ツ四ツ上つて見て、「ヤアこりや何で殺そふ刃物が無い。帯を解て絞殺そ

いとらしい！
可愛らしい
いはれぬ口上
要らざる口上

櫻娘—普通—廻

ふか。いや緩りとする間はあるまい。煙草で燻べ殺そふか。酔て先へ此方が死ふ。何として能ろふぞ。鉄刀でも剃刀でも鐵物がな」と、座敷中を差足し、うろくうろく尋廻り、吾「ヤ思ひ付たぞ火燵の火箸、火に焼て喉笛を貫さば、刀も同然」と蒲團をあけて手を入れ、「熱やく」と懐中の服紗に持ち添へ、陸奥の韓紅の錦木や、枝珊瑚珠と焼付たり。「嬉しや冷ぬ間に」と立上らんとする所へ、仁三郎が母妙慶、「吾妻様まだ起てか」と、によるく來れば肝潰し、袖の影に押隠し吾「ハアかみ様か。私も早寝みまする。冷ぬ間にこな様も、目の寤ぬ間に暖かに、熱ふして寝やしやんせ」と狼狽挨拶跡先なり。妙慶更に氣も注ず、「お前は果報な妓様や。曲輪で繁昌仕つめて間もなふ根引の松様。千年も萬年も藤様との御中さめぬ様に遊ばせ。其いとらしいお氣立ではさめまいく。明日お目にかよりませふ」と、辭義を陳て立歸れば、火箸は水と成りてけり。吾「エ、いはれぬ長口上焼直さん」と、蒲團あけても火燵も冷たし。「エイ阿呆らしいなんほうさめぬと云やつても、炭火まで冷きつた」と、吹つ煽いづ氣をせく所に、二階より仁三郎醉覺の長あくび、客の脇指持なら、が目をすりく階子をおり、「ヤア吾妻様爰にか。叔醉ました」と下に居る。吾妻脇差に心づき、「それは藤様の腰の物。こなさんも先氣の通らぬ。客の及物預るとは渡並の客のこと。藤

鹽茶一爵を醒す
もの

背中に腹一詰、
夫にはかへられ
ぬ意を食む

様とは女夫になり、明日請出さるゝ今宵となり、心中はせまいしその儘置いていかんせ」と、云へどもふらく居睡りながら、与はて一夜でもお客の中は弓矢の禮儀はづされぬ」と、云ふ中に脇差の柄を膝に押へて、「いかふ更たに寝まんせ」と、云へども柄には氣もつかず、「明日御見なりませふ。鹽茶を飲で寐てくれふ」と、脇差の鎧を持って立つ程に、柄は残れど下は見ず、目はそら鞆をぶらさけて、ふらく勝手へ入にける。吾「ア、く、右難い神佛の宛いか」と、戴きくひつそばめ、立て見ても後より、又誰ぞ來る様で危さ恐さ右ひだり、足もすはらぬ行燈の我影に愕りして、わななく慄ふ箱階子ぎしくぎしく鳴る音も、耳にこたへ胸にしみ、氣を押へ息をのみ、やうく惱み登りつき、溜息吐たる女業、我身ながらも興醒る、藤が臥たる北枕、「いとしや科もない人を」と、恐しながら背中に腹、胸先に打跨ぎ、切先差あてどうと乗る。乗られてふつと目を寤す。吾「これくくく聲立まい。御身に恨も罪もない。假にも惚てくれた人。殺したふはないわいな。殺さるゝ御身より殺す我身が悲しい」と、涙は双に傳ひしが、「なふ生て置ては請出して、女夫になるが情ない。私には大事の男が有る。その男と縁切れる戀路の仇となる故に、今刺殺す懐中の小判を貧な男に遣たい。殺生の罪盜の罪、男の爲につくる心。少しは恨を晴れてたも」と、又はらくと泣きけ

寒さ—恐ろしさ
のり返ろ—仰の
げにそる

器用な—立腰な

もやつき—ごた
ごた

れば、得心ごころしんやしたりけん、叶はじとや思ひけん、目を塞ふさいで返事へんじもせず。「サア只今」とぐつと刺さし、止目とどめまでは手も弱り、其儘捨て懐中の小判を兩の袂たもとに入れ、階子下はしごれば後より、掴つかみ立つたるその寒さ。寒風肌かんふうはだも縮ちぢみ縮ちぢぶるひ、半死半生の手負ておひ、のり返つてうんといふ、聲こゑに驚おどろき階子こゝろ落ち、うめく聲こゑに妙慶親子、家内の男女我もくと断かき出々々、「ハア南無三寶續つづいて階子こゝろ落ち、うめく聲こゑに妙慶親子、家内の男女我もくと断かき出々々、「ハア南無三寶藤様を切たは、切手きりてが有らふ」と、爰こゝ彼處尋ね探さがして縁端えんはたに、人こそと引出せば「是はく吾妻殿、それ取放とりはなすな縛しばれ括くれ」と立騒たてさわぐ。吾「いかにも切るも私が切り金も私が取たからは、氣遣きづかひしやるな遁にひはせぬ」と、尤も器用きような白狀はくじやう一先々龍田の門衆かみ兄御あにごの方へ、注進ちゆうしんをぬかるな」と追々おひ人を走らせける。勝二郎は約束の時分過ると紙子かみこに股引ももひき、直すぐに丹波の旅出立たんでだちにて來て聞けば、吾妻が客を切たと町まちのもやつき。つつと入て、勝「是々亭主、身は江戸屋勝二郎と云ふ吾妻が男、何科なにがなりとも同罪にしてくれ」と、座敷ざしきにどうと座しければ、吾妻は泣いて目も明あかず、「無分別むぶんべつなことをして、思ふが仇あだとなりました」と、顔をさけてぞ居たりける。町の役人龍田より走り歸つて、「手負ておひの兄御あにご只今是へ御出」と、いふを見れば古いにしへの手代新七、木綿布子もめんぬのこも物さびて「御免あれ」と座敷に入り、主従しゆうじゆう顔を見合せ互に「はつ」と驚く

氣病—氣鬱病

布子—歸入

中、勝二郎赤面し、「面目なや恥かしや。其方に顔は合されぬ」と、兩袖顔にあてうつくまりてぞ隠れける。新七恨の兩眼に涙を浮め大聲あけ、「エ、聞へませぬ旦那殿、我等に顔を隠さるゝは面目ないか恥しい。コレその恥しがりが遅かつた。五年以前に新七を恥かしおと思召さば、御身代は潰れませぬ。まづ斯有らふかと存じた故様々の強意見。新町橋でお足にかけられ踏れながらも御意見は、親旦那の御恩の報りたさ。女房お半はお身の上を苦に致し、氣病を煩ひ去年の春終に空しうなりました。彼めも元は御家來、お主を苦にして相果るは、下人たる者の本望、聊か悔も致さばこそ。親旦那のお蔭で少のもとで家屋敷、在所龍田の親共も飢凍へぬ程なれども、いや〜お主は流浪の身、家來の安樂道ならずと、家屋敷田地まで賣代なし、有銀十八貫目、御覽の通り我身には碌な布子も着ぬ體ながら、親旦那の十七年忌は内證でお前から遊ばすと申なし、恐らく江戸屋の追善と笑はぬ程の法事を致し、御出世の願ひの爲京都公家方、折々の付届油斷もなく、残る金二百兩いとしや吾妻殿、新町の殘金ゆへ此所に勤と聞き、御兩人の氣を思ひやり、弟の藤五郎が請出す分で沙汰なしに、お二人一所に置ましたらば、貧苦の中のお樂、高いも低いも親たる身の悦びと云ひ子の悦び、お前の御機嫌よい顔を、草葉の蔭の親旦那に、見

せましたい心ざし。御奉公の仕納と存じ立たる所に、藤五郎は吾妻殿の手にかよつて死んだか。でかいたく。此新七はお主の爲心ざしの奉公は仕たれども、一命の奉公は其方に劣つた。兄に優つた忠の者。是々御亭主只今申す通りに虚言はない。兄が言分ないと云ふ證文を致すからは別條はあるまい。夫とても是非處の作法下手人を取るならば、水いらすに此新七、女房は死ぬる親はなし。一人の弟は相果る。雲のうちを尋ねても、お主より外世の中に大事の人はなきものを、隔てて下さる且那殿恨めしう思ひます」と、どうと伏して泣きければ、吾妻を始め亭主親子、町内近所の者迄も、誠の心を感じつと、皆涙を流しけり。勝二郎飛で出、「ア、過つたく。斯様な身と成果たも其方を踏んだ下人の罰と、かねく悔み歎いた。藤五郎を弟と知らいで吾妻が殺したも我ゆへぞ。主故に身上潰し其體となつたを見て、此勝二郎がいかにか畜類なればとて、見ても聞てもゐられふか。死ぬるにも死なれもせず、とても情に其方が此足にかけ、以前そちを踏んだ様に勝二郎を踏んでくれ。一ツの罪も脱るゝ爲。さりとては新七某を踏んでたも」と、足の下に背中を向け、手を合せて泣きければ、吾妻は絶つて、「弟御の仇は私。刺殺して下さんせ。どうも生ては居にくい」と、歎き悔む聲々、新七は飛退り、「ア、勿體ない冥加ない。新七と

いきりきる一劈
をつくる

願ほどき「祈願
の叶ひし御禮を

思召すが定ならば、御夫婦心を全ふして出世を見せ下されば、踏殺されても大事ない」と、三人顔を差寄せて、聲をばかりに泣き居たり。斯る所に八幡の神主紀太夫より、御吉左右の早飛脚いきり切て案内す。「そりや吉左右とは悦ばし」と、狀箱開くも疾し遅しと封切つて拜見す。何々江戸屋勝二郎事、家來新七數年の歎き感じ思召され、關白左右の大臣御憐愍に依て、八幡の本地舊の如く返し與へらる。追付歸宅あるべき」と、讀も終らず八拜九拜悦び踊り飛上り、跳上りたる淀鯉の、瀧の壺より涌出る、白銀黄金の鶏寶、ときは勝鬨悦びどき、五畿内五ヶ國神々に、先願ほどきに三重悦びの、幣帛をあけ神樂をあけ、詣り納むる八幡山、此浪花津の恵方神、民安全こそ目出たけれ。

